

ドラゴンボートについての研究

A study of dragon boat

1K07B124-3 高橋 元気

指導教員 主査 寒川 恒夫先生 副査 矢島 忠明先生

(目的)

この題材を文化的にとらえるとするとその地方でなぜドラゴンボートを取り上げているのか、またその町と協力しながら行っているのか。次にその資金面はどのような所から回って来ているのか。他にも参加者をどうやって探しているか、そのためにどのような活動をしているのか。他の県ともコンタクトを取っているのか。それはどのような経路で繋がることができ、そこからどのように協力してドラゴンボートの大会を開催していくのか。今後どのような活動を行っていきどのように大会やドラゴンボート自体を活動していくのかといったことを調べていくことでスポーツと文化の関係を調べていきたいと思いこの題材にしました。

(方法)

知人の方から借りた大会関係資料やパンフレットなどを数年分借りて比較などを行い調べていく。また知人にドラゴンボート実行委員会に所属している方がいるのでその方にインタビューをして分からない点や理解できなかった点を尋ねる。

(結果)

大会が始まったきっかけは世界大会の予選が行われることとなり会場として使われたのがきっかけ。また同時期に国民体育大会が宮城県で行われることとなりボートの会場となり建築したボートのための川の設備を活かしたスポーツを探したところドラゴンボートに決まった。運営資金は町からの補助金が主でありスポンサーなど後援してくれる会社からの支援は賞品や景品などで資金面では一切ない。参加者を増やすためにさまざまな団体に声をかけているがなかなか集まらないのが現状。他県や他の地域にもっと働きかけていかなければいけない。活動自体は大会前の数週間しか行っておらず、今後はもっと幅広く活動していかなければいけないという反省もあった。他の県、他の地域との関係は現在ないに等しい。今後もっと交流を深めていかなければ競技のためにならない。今後ドラゴンボートが目指していくものはもちろん競

技として大会に参加し上位に入ることもあるが、それだけにこだわらず気軽に参加できる競技としても広めていきたいとのこと。また距離が遠いが同じルールで行っている京都府との連携をもっと深めていきたいということだった。

(考察)

今回調べてみて分かったことは地域に新しいスポーツという文化を取り入れようとするのはさまざまな点で難しく困難であることが分かった。初めはもの珍しさなどで参加してくれるかもしれないが何年も続けていくことの難しさも理解することができた。だが地域の住民や市町村などが協力してさえもらえれば不可能ではないということも分かった。ただ全く経験がないものや地域との関連性がないものを取り入れようとしても失敗するだけという可能性もあるのでそのところをどうやって兼ね合いしていくかという難しさも理解することができた。将来的にはスポーツという文化で他の地域の人達と交流ができるようにしていかなければいけないのと私自身がそういった行動をしていかなければいけないと同時に同じ目的で行っている活動に積極的に参加していかなければいけない使命のようなものも感じることができた。現代社会ではコミュニケーションが取れないなどの問題やコミュニケーションを取る相手がいないという問題を解決しなければいけないが、それを解決するために適しているものがスポーツではないかと考える。スポーツを一つの文化としてだけの面を見るのではなくスポーツのさまざまな可能性を信じてもっとスポーツが社会に貢献できるよう、スポーツがなくなるといけないような社会を目指していくことが大切でありスポーツを学んできた私達が行っていくべきことではないかということを考えた。そのためにはスポーツを気軽に行える環境作りをして経験してもらえるような場所や機会を作っていくことが必要であり今後活動を行っていくのならば目指していかなければいけないということも考えた。